あ と が き

私が研究をはじめたのは、劉鉄雲「老残遊記」からだった。「老残遊記」が掲載されたのは『繡像小説』である。その『繡像小説』は、現在でこそ影印本が２種類も出ている。それ以前には、全72期の完揃いなどほとんど見ることはできなかった。昔、その珍しい部類である原本を手にとって小説目録を作成したことがある。該誌を刊行したのが、商務印書館だった。しかも、刊行時期は金港堂との合弁会社であった時期と重なる。だが、合弁の詳細については、ほとんど解明されていなかった。詳細どころか、両社の合弁そのものが知られてはいない。私の興味が商務印書館と金港堂の合弁問題に向かったのは自然なことだ。今から思えば、そういう流れだった。

商務印書館が創業してから百年以上の時間が経過している。現代中国において、長い歴史をもつ出版社としてはほぼ唯一の存在である。

研究対象として商務印書館を考えるばあい、その歴史の長さからして接近する方面は多岐にわたる。たとえば、印刷、編集、刊行、経営に分けることもできる。また、社史といっても通史もあれば、ある時期に限定特定することも可能だ。商務印書館の社員、刊行物、あるいは関係する作家たちも多数にのぼる。現在でこそ知られるようになったが、日本金港堂との合弁もある。その合弁時期は短いとはいえ、日中文化交流としてとらえれば、これも大きな問題だ。

研究の１例として、日中合弁問題と『繡像小説』についての文章を掲載した。商務印書館という出版社を理解してもらうための手がかりになるだろう。こまかく見ていけば、いまだに解決していない問題があることがわかるはずだ。

本目録は、私がすすめてきた初期商務印書館研究の副産物といってよい。『繡像小説』あるいは日中合弁会社について調査する過程で収集した論文群が基礎になっている。

商務印書館が金港堂と結びつくまでの上海における印刷業界状況も視野に入れて資料を集めている。商務印書館だけに限定しているわけではないのだ。私の判断で必要だと思う文献は採取している。商務印書館とは関係がない、と思われる文献があるかもしれない。そのばあいは、無視して下さるようにお願いする。

関連する日本語研究文献もできるだけ収録した。単行本も当然収録の対象としている。ひとつひとつの研究論文を著者別に分類しなおした。つまり、個別の研究文献を主体にした目録である。それらの題名を見れば、なにを論じているのかおおよそのことが理解できるだろう。本目録の特徴のひとつといってもいい。

収録した文献数は、全体で1,944件になった。発表地域別でいえば、中国1,537件、日本362件、香港6件、台湾35件、その他4件である。

樽本照雄